

令和2年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 妹尾 正巳

本校のミッション
今日より輝く明日のために
・目的をもって学校生活を送る ・確かな学力を身につける

学級数	12 学級	児童(生徒・園児)数	273 人
職員数	26 人	家庭数	244 戸
学校関係者評価委員	藤井 瞳(学識経験者・川崎医療福祉大学) 川上 公一(学識経験者・前県立矢掛高等学校長) 高月 秀人(学識経験者・県立矢掛高等学校長) 藤原 立志(地域住民・学識経験者・元小学校長) 岩崎 恭子(地域住民・スクールサポーター) 古城賀津子(地域住民・学校支援地域コーディネーター) 古中記久夫(保護者・矢掛中学校PTA会長) 三宅 晴久(保護者)		

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	・学力向上を目指した授業改善を図る。 ・総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。	・主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、授業改善に取り組む。 ・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協働して課題を解決することで活用力を育む。 ・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域に貢献するという観点で、系統的に取り組む。	・授業の中に、相互に関わり合える話し合い活動を積極的に取り入れ、協働により課題解決できるような授業づくりに努めている。 ・ペアやグループでの活動を通して、80%以上の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。 ・「総合的な学習の時間」に、85%以上の生徒が、自ら課題を設定し、調べたことをまとめ、自分の考えを深めるとともに、まとめや考えを聞く人に分かるように伝える(発表する)などの学習活動を通して、地域に貢献しようとする態度が身についている。	・「岡山型学習指導スタンダード」を意識して授業を行っている、96%の教員が回答し、授業の中でペアやグループ学習など生徒が意見を考える場面を多く設定していると回答している。 ・生徒の97%が、授業の中で、グループ活動をする場面が「ある」または「どちらか」と回答している。 ・教員は授業の中で、ペアやグループ活動をする場面を設定し、生徒が自分の意見を発表したり、友達の意見を聞いたりする場面を増やすことができている。 ・岡山県学力・学習状況調査では、1年生では約86%の生徒が、2年生では約92%の生徒が「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」という設問に対して肯定的な回答をしている。 ・総合的な学習については、矢掛プロジェクト(地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に貢献する)として、「課題設定」「調査・体験」「発表」と計画的に学習を進める中で、生徒の90%が「総合的な学習の時間に積極的に参加している」という質問に肯定的に回答している。	A
2	確かな学力	・基礎学力の定着と自学自習の充実を図る。	・帰りの会でのドリル学習(夕学)を充実させる。 ・長期休業中やテスト週間、部活動がない日の放課後に個別指導の機会を設定する。 ・「生活ノート(矢掛版)」を活用し、帰りの会で課題と必要時間を確認するとともに自主学習を含めた家庭学習の計画を立てることを通して、自己管理能力を育む。	・ドリル学習(夕学)について、帰りの会を使い、基礎学力の向上に向けて、有効に活用できている。 ・テスト週間に行っている。 ・80%以上の生徒が、時間的にも(1時間以上)内容的にも、十分な家庭学習に取り組んでいる。	・帰りの会でドリル学習(夕学)には、全校生徒が同じ時間に落ち着いてきちんと取り組むことができている。 ・学年ごとにテスト週間に行っている。3年生は2学期から毎週水曜日にも行っている。また、教科やクラスによって必要な場合は不定期に行っている。 ・「家庭学習に毎日、1時間以上取り組んでいる。」という生徒への設問では、64%の生徒が肯定的に回答している。 ・「子どもは、学校の宿題や自主学習にきちんと取り組んでいる。」という保護者への設問では、約80%の保護者が肯定的に回答している。 ・生徒と保護者の意識に差があり、家庭学習の取り組みに対して、改善・工夫の余地が見られる。	B
3	支え合う生徒	・良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。	・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。 ・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。	・85%以上の生徒が、「授業では自分の意見や考えをすすんで発表している」と回答している。 ・5月のAssessアンケート結果よりも学級生活に満足している生徒が増えている。	・各教科で、根拠をもとにグループで話し合う活動が積極的に取り入れられ、「授業の中で、グループ活動をする場面がある。」の項目では98%の生徒が肯定的な回答をしている。「授業では、自分の意見や考えをすすんで発表している。」の項目では71%(前年度より+3%)の生徒が肯定的に回答している。引き続き授業等で話し合う場面を設定するとともに、安心して伝え合える雰囲気づくりのための取組を工夫していく必要がある。 ・体育会や合唱コンクール等の行事が中止になる中で、各学年で集団づくりのための活動を行った。4月、7月、12月に実施したASSESSアンケートでの生徒の生活満足度は58→58→58(1年)、61→61→62(2年)、61→61→60(3年)であり、学校内外での生活への適応を示す50を上回る数値で推移している。8月にはASSESSアンケートを活用し、学級全体の傾向を分析したり、個別に生徒の見立てを行ったりするための研修を行い、日々の学級経営に活かしている。	A
4	支え合う生徒	・認め合える、支え合える、繋がり合える集団づくりをする。 社会的実践力が身につくようにする。	・グッドビヘイビアチケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(School-Wide Positive Behavioral Interventions and Supports:学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。 ・年3回のAssessアンケートを活用し、学級集団や個々の生徒の状態や変容を把握する。	・学校生活に関するアンケートで、「グッドビヘイビアチケットをもらおうと、うれしい」という質問項目において、「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した生徒が90%以上である。 ・3回目のAssessアンケートの「生活満足感」において要支援の生徒が各クラス5%未満である。	・平素の生徒の奉仕的な活動や、継続的な学習の取組に対して教員から生徒へグッドビヘイビアチケットを渡すことは日常的に行われている。また、学期に一回程度、生徒同士で渡し合う機会を設け、互いに認め合う雰囲気づくりを行っている。「グッドビヘイビアチケットをもらおうとうれしい。」の項目では88%の生徒が肯定的な回答をしており、生徒が積極的に期待される行動に向かうための一助となっている。 ・ASSESSアンケートの「生活満足感」の要支援生徒の割合は、通常学級においていずれも平均値17%を下回っている。割合が高めのクラスでは約14%、約10%となっており、個々の抱える課題に対して細やかな支援を行う必要がある。ASSESSの分析をはじめ、日頃の生徒観察や生徒・保護者とのやりとりを基に、教員同士や外部機関とも適切な方法を協議しながら対応している。	A
5	生徒の支援	・学校生活に適応しにくい生徒への支援を充実する。 ・学校生活に適応できるように個別の支援を充実する。	・不登校の未然防止に向けて、出前授業や体験授業、相互授業参観など、小・中連携の効果的な取組を行う。 ・スクールカウンセラーや外部の関係機関との連携を一層密にする。必要に応じて、ケース会議を行い、情報共有と支援の方向性について協議する。 ・生徒指導上の課題の未然防止に向けて、学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密にする。防犯教室や講演会を行い、規律のある落ち着いた学校づくりに取り組む。 ・毎月の学校生活アンケートを継続し、生活ノートや班長会を活用して生徒に関する情報を集めることで、いじめや不適応の早期発見、早期対応に努める。	・小学校と連携を取りながら、児童・生徒の様子について情報を共有し、効果的な指導を行うことができている。 ・不適応傾向にある生徒については、専門機関(専門家)と連携して支援方針を定め、状況に応じて幅広く、他機関からの援助を得ている。 ・生徒指導の方針を徹底し、学校アドバイザーや関係機関と連携をとることで、落ち着いて学習できる環境を整えるとともに、講演会などで生徒に社会のルール等を啓発する活動を行い、問題行動を未然に防ぐことができている。 ・アンケートや生活ノートを通して、生徒の情報を把握、共有し、いじめや不適応などの問題行動には直ちに対応できている。	・不登校の未然防止のために、入学する前に小学校と連携をとり、児童・児童生徒の情報を共有した。出前授業や体験授業で、児童に中学校の雰囲気や入学前に体験させた。 ・心の教室の規約を変更し、登校しにくい生徒の居場所を確保することによって、不登校を未然に防いだケースがあった。ケース会議では、スクールカウンセラーの助言をおおきながら、生徒や保護者に必要な支援を迅速に行った。 ・全校を対象にした情報モラル教室や1年生対象の非行防止教室を実施し、学校アドバイザーの協力を得て校内の見回りなどを継続的に実施している。また、毎週月曜日には生徒指導担当者会を開き、生徒の様子についての情報交換や、指導方針の確認を行っている。休み時間の過ごし方や友人トラブルなどで時折注意をする場面もあるが、概ね落ち着いた生活を送っており、引き続き、問題行動の未然防止のための取組を継続していく。 ・日々の生活ノートや毎月の生活アンケート、年2回の教育相談などを通して、生徒の困り感の早期発見に努めている。「困ったことや要望は、学校に相談しやすい。」という項目においては、87%の生徒が肯定的な回答をしている。 ・学期に一度いじめ対策委員会を開き、外部機関のアドバイスを受けながら、未然防止や早期発見のための取組の検討、これまでの生徒対応の確認や見直しを行っている。	B
6	生徒の支援	・特別支援教育の充実を図る。	・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有するとともに、関係機関や専門家、保護者と連携し、個別の支援を充実させる。 ・特別支援教育に関する校内研修を計画的に行う。	・通常学級においても、特別な支援を必要とする生徒についての「個別の教育支援計画」を作成している。 ・生徒の実態に応じて必要な内容の研修を計画的に行い、生徒理解を深めている。	・今年度より通常学級でも「個別の教育支援計画」の作成に取り組むことができた。内容を学年団で検討する機会を作るなど工夫をしていきたい。また、高等学校への連携引き続きも今後大切にしていきたい。 ・「個別の教育支援計画」の作成を通じ、支援を必要とする生徒への配慮等、具体的に考え、方針を立てて対応することができた。 ・ケース会議を生徒の実態に応じて適宜行うことで、地域の専門家の先生方から、対応についてや進路についての情報やアドバイスをもらうことができた。 ・教育支援員の配置もあり、特別支援学級、通常学級の支援の必要な生徒の個々の特性に合わせた支援が行われている。	B

分析・改善策

・来年度から完全実施される新学習指導要領の主旨に基づき、評価の見直しや、GIGAスクール構想を踏まえた「岡山型学習のスタンダード」+「ICT活用」を推進していかなければならない。生徒がICTを文房具として主体的に活用する視点に立っての授業改善が必要である。学習単元のデザインを生徒にわかりやすく示し、自己評価を促進させるOPPシート(One Page Portfolio)の利用や定期考査の活用方法など、来年度の計画に盛り込みたい。 ・家庭学習の定着については、まだまだ不十分であり、教師側の指導のあり方やフィードバック等の方法も考えていく必要がある。 ・効果を上げているグッドビヘイビアチケットの活用については、さらなるシステム化による充実を図り、支持的な風土のある集団を目指したい。 ・アセスの見とりに組織的・計画的に行い個別の支援の充実を図りたい。(3次支援) ・不登校対策として心の教室のさらなる充実と「ICT活用」をすすめたい。(3次支援) ・新たな不登校生徒を生まないために、「ピアサポート」の導入や、「社会性や情動の学習」等に取り組んでいきたい。(1次支援)

学校関係者評価

1 総論 自己評価は妥当である。コロナ禍の中でも、生徒たちは前向きな生活ができている。 2 課題への対応 グループ学習やペア学習がよくできている。家庭学習の充実に向けて学校は積極的にかかわっている。教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる姿勢は評価に値する。タブレットを活用した教育については、効果が上がるように研究していただきたい。「グッドビヘイビアチケット」は、生徒の自己肯定感の高まりとともに他者を認め合う風土の構築にもつながっているため、継続した取組としてほしい。 3 学校・家庭・地域の連携 学校と家庭との連携をより強固なものにしてほしい。学習面では学校と家庭の学習を系統だてて捉えられるように家庭に対して情報発信が必要である。学習課題の出し方、自主学習のあり方についてさらに工夫してほしい。中高の連携は積極的になされており、県下のモデルとなる活動であらう。 4 学校評価 来年度に生かせる分析・改善策になるよう、具体的に焦点化された対応策を求めたい。評価に関わるアンケートや評価自体が教職員の負担にならないようにしてほしい。項目を精選されたい。「働き方改革」が求められているなか、学校評価も適宜効率化されたい。

来年度の重点・方針

- 1 確かな学力を身につける。
 - ①主体的・対話的で深い学びの実現と、生徒の「ICT活用」を目指した授業改善を図る。
 - ・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協同して課題を解決することで活用力を育む。
 - ・各教科の授業で、タブレット端末を効果的に活用できるように研修し、授業改善を図る。
 - ②学習習慣の確立を図る。
 - ・授業と家庭学習がつながるように工夫する。
 - ・「生活ノート」と自主学習を切り離しそれぞれの役割を焦点化する。
 - ・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が適切に支援できるように、学校だよりや学年だよりで啓発していく。
 - ③総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。
 - ・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域・社会に貢献するという観点で、系統的に取り組む。
- 2 認め合える、支え合える、繋がり合える集団づくりをする。
 - ①支持的風土のある学級づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。
 - ・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・「Good Behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。
 - ・年3回のアセスを活用し、生徒個人の課題分析や変容の把握をする。学年内で情報の共有をし、支援の方策を構築する。
 - ②社会的実践力が身につくようにする。
 - ・生徒会や専門委員会の活動を通して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。
 - ・情報モラル教育を充実させ、情報端末(スマートフォンも含む)を、正しい判断力を持って使えるようにする。
 - ・「地域を支える学校」として、生徒が自主的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。
- 3 学校生活に適応できるように個別の支援を充実する。
 - ①学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。
 - ・中1ギャップの解消に向けて、出前授業や体験授業、小学校への授業参観など、小・中連携の効果的な取組を行う。
 - ・不登校対策担当を中心に、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、外部の関係機関との連携を一層密にする。必要に応じて、ケース会議を行い、情報共有と支援の方向性について協議し、取り組む。
 - ・長期休業中やテスト週間、場合によっては放課後に個別指導の機会を設定する。
 - ・教育相談や学校生活アンケート、生活ノートにより、生徒に関する情報を集めたりすることで、困り感やいじめの早期発見、早期対応に努める。
 - ②特別支援教育の充実を図る。
 - ・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有し、個別の支援を充実させる。
 - ・関係機関や専門家、保護者と連携し、個別の支援を充実させる。
 - ・特別支援教育に関する校内研修を外部講師により、計画的に行う。
 - ・「個別の教育支援計画」の作成を通し、支援を必要とする生徒への配慮等の情報共有をする。また、方策を具体的に考えて対応する。